

武蔵野音楽大学
学芸員課程
年間活動報告書
2025



Annual Report of the Curator Course
Musashino Academia Musicae
April 2025-March 2026

表紙の写真

ベルmont音楽絵画『ベートーヴェン : 交響曲 第7番 第2楽章』

Ira Jean Belmont(1885-1964)は、ニューヨークを拠点に活動した画家。音楽と絵画の融合を図り、音楽の印象を絵画で表現する“Color-music expressionism”という分野を開いた。

所蔵：武蔵野音楽大学楽器ミュージアム

目 次

1. 巻頭言	1
2. 学芸員課程カリキュラム	2
3. 本学の学芸員課程の特徴と近年の傾向	3
3-1 学芸員課程とは	3
3-2 本学における学芸員課程の歴史	3
3-3 本学における学芸員課程の特徴	4
3-4 本学における学芸員課程の意義	4
3-5 近年の履修学生の傾向	6
4. 各科目の報告	8
(1) 博物館学概論	8
(2) 生涯学習概論	9
(3) 博物館情報・メディア論	11
(4) 博物館展示論	13
(5) 博物館経営論	15
(6) 博物館資料論	17
(7) 博物館資料保存論	19
(8) 博物館教育論	23
(9) 博物館実習	26

1. 巻 頭 言

アートマネジメントコース専任講師 脇谷 真弓

本報告書は、令和4（2022）年に刊行された『武蔵野音楽大学 学芸員課程 年間活動報告書 2022』以来、3年ぶりの刊行となります。この間、日本の博物館を取り巻く環境は大きく変化してまいりました。とりわけ、令和4（2022）年4月に「博物館法の一部を改正する法律」が公布され、令和5（2023）年に施行されたことは、約70年ぶりとなる大きな制度改革として特筆すべき出来事です。この改正により、博物館は従来の「社会教育」の枠にとどまらず、「文化芸術の振興」「観光への寄与」「地域振興」など、多様な役割を担う存在として改めて位置づけられました。こうした動向を背景に、博物館には文化の継承と創造を担う拠点として、また地域社会の発展に寄与する中核的な存在として、これまで以上に幅広い役割と積極的な取り組みが期待されています。

この他、今回の改正における特徴の一つに、「博物館の登録制度の見直し」が挙げられます。従来、登録博物館を設置できる主体はかなり限定されていたために、学校法人が運営する大学博物館の多くは制度の対象外とされてきました。しかし、改正後は一定の審査基準を満たすことで、大学博物館にも登録博物館としての道が開かれるようになりました。これは、大学博物館の位置づけに大きな変化をもたらしたことを意味しています。すなわち、大学博物館というものが、学術研究や教育を主目的とする「大学内部のための施設」であるばかりでなく、「文化資源の活用や地域連携を担える存在」として、その役割が拡張したと考えられるのです。

一方、本学においてもさまざまな変化が生じています。近年のグローバル化の進展を背景に、中国を中心とする留学生が増加し、学芸員課程の履修者にもその傾向が表れ始めています。さらに、令和4（2022）年度より、本学は科目等履修生の受け入れを開始したことで、学芸員課程には多様なバックグラウンドを持つ履修者が増加することとなりました。

本報告書は、こうした近年の動向を踏まえ、本学における学芸員課程の現状と教育活動の記録として刊行するものです。

2. 学芸員課程カリキュラム

博物館に関する科目

履修年次	期間	科目名	単位数	担当教員
1	前期	博物館学概論	2	熊澤 弘
1	後期	生涯学習概論	2	守重 信郎
2	前期	博物館情報・メディア論	2	久保 仁志
2	後期	博物館展示論	2	久保 仁志
2	集中	博物館経営論	2	久保 仁志
3	前期	博物館資料論	2	脇谷 真弓 守重 信郎
3	後期	博物館資料保存論	2	脇谷 真弓 守重 信郎
3	後期	博物館教育論	2	脇谷 真弓
4	通年	博物館実習	2	久保 仁志

履修指定科目

履修年次	期間	科目名	単位数	担当教員
1～4	前期	文化史Ⅰ	2	中川 俊宏
1～4	後期	ヨーロッパの美術史Ⅰ	2	中江 花菜

3. 本学の学芸員課程の特徴と近年の傾向

脇谷 真弓

3-1 学芸員課程とは

学芸員は、博物館や美術館などに置かれる専門的職員で、資料を収集・保管し、調査研究を行って文化財としての価値を見出し、展示・公開、また教育普及活動などの事業を行い社会に伝える役目を担うことが「博物館法」で規定されています。本学においては、開講されている「博物館に関する科目」および「履修指定科目」の単位を修得し、かつ学士の学位を取得することにより学芸員資格を取得することができます。

学芸員課程は、収集・保管、調査・研究、展示、教育などの博物館における主要な機能を担う専門家を育成するために、単に知識的な学修にとどまらず、博物館実習に代表されるように、実践的かつ専門的な技能や知見を習得できる学びであると言えます。

3-2 本学における学芸員課程の歴史

本学において学芸員課程が開設されたのは、平成 19（2007）年のことでした。1990 年代以降少子化が加速する中で、日本の大学は「大学全入時代」を迎えました。一方で、大学進学率は上昇を続け、各大学は生き残りをかけた大きな転換を迫られることとなりました。このような時代の変化を背景に、1990 年代後半から 2000 年代にかけて、多くの大学で新学部や新学科の設立が進められました。

本学も例外ではなく、平成 18（2006）年にヴィルトゥオーソ学科（現ヴィルトゥオーゾコース）が、平成 19（2007）年には音楽環境運営学科（現アートマネジメントコース）が開設されました。これに伴い、音楽環境運営学科の学生が取得できる資格として、本学に学芸員課程が開設されたのです。その後、平成 29（2017）年に実施された学科再編およびカリキュラムの改変によって、学芸員課程は音楽環境運営学科の学生に限らず、すべての専攻の学生に開かれることとなり、履修が可能となりました。

その結果、音楽芸術を多角的に学ぶ科目としての位置づけが強まり、本学卒業時に取得できる資格として、教員免許課程や小学校教諭免許状と並び、学芸員資格の取得が可能となりました。

3-3 本学における学芸員課程の特徴

博物館における学びの大きな特徴の一つに、「モノに即した学び」が挙げられます。資料に直接触れることで、教科書や講義を中心とした学びでは得にくい、より深い理解が期待できます。例えば、資料の質感や重さ、大きさ、音、細部の構造などは、視覚・触覚・聴覚といったさまざまな感覚と結びつくことで、実体験として理解を深めてくれます。このように、「モノに即した学び」は、感覚的体験を通して知識の理解をより具体的かつ実感的なものにする点に特徴があります。

この他、「体系的な学び」も博物館ならではの学びの特徴と言えます。博物館の資料は、通常、時代・地域・用途などの各分類に基づいて展示されています。そのため、学習者は個々の資料だけでなく、コレクション全体を俯瞰的に捉えることができます。つまり博物館は、体系的な視点を育てる上で、非常に適した学修環境であると言えるわけです。このような観点から、博物館における学びは、学習者に理解の深化と視野の拡張を育む上で、重要な役割を担っていると言えるでしょう。

本学には、大学博物館である「武蔵野音楽大学楽器ミュージアム」が、キャンパス内に設置されています。同ミュージアムは、創立者福井直秋が「世界の各民族の音楽の幅広さを知ってほしい」という考えのもと、昭和 35（1960）年に現在の楽器ミュージアムの前身の施設として「楽器陳列室」が設立されたのが始まりで、わが国の音楽系博物館としては先駆的な存在です。創立者の理念に基づき、そのコレクションはヨーロッパにとどまらず、日本や世界の民族楽器など幅広い地域の楽器を収集していることに加え、楽器模型や音楽絵画など多様な関連資料も収集対象としていることから、同ミュージアムの最大の特徴は「資料の幅広い地域性と多様性」と言うことができます。現在、コレクション数は 5,900 点を超え、これは楽器の博物館としてはわが国最大規模になります。この楽器ミュージアムの存在こそ、本学の学芸員課程にとって大きな特徴であると言えるでしょう。

このため、本学の学芸員課程では、講義で専門的な基礎知識を身に着けつつ、「博物館資料論」「博物館資料保存論」「博物館教育論」「博物館実習」などの複数の科目で楽器ミュージアムを活用し、「モノに即した学び」「体系的な学び」を取り入れた実践的な授業が行われています。

3-4 本学における学芸員課程の意義

音楽大学である本学において、学芸員課程を履修することにどのような意義が見い出せるでしょうか。

本学は創立以来、「音楽芸術の研鑽」と「人間形成」を教育方針に掲げています。創立者であり音楽教育者であった福井直秋は、「**芸術の深さは、これを生みだすものの人間性に影響される**」とし、「**この人間性が裏付けられるのは、多くは一般教育からである。（略）音楽大学である以上、音楽を第一義的に考えるのは申すまでもないが、しかし一般教育を無視した音楽第一主義であってはならない。**」と説いています。音楽大学において、音楽専門科目は言うまでもなく最重要であると言えますが、しかし音楽専門科目だけでは不十分で、他分野の科目、つまり音楽専門科目以外の幅広い学びこそが「人間形成」という点において極めて重要であることを明確に示しているものです。

学芸員課程における学びは、芸術文化を多角的かつ包括的に捉え、幅広い知識と視点を養う点において、本学の教育理念と合致するものです。例えば、社会教育施設としての博物館の機能や、博物館資料に関する多面的視点、文化財保存学等を修得することにより、社会的・歴史的・科学的・美術的・民族学的といった多領域にわたる知見を得ることができます。これらは、創立者の説く「人間形成」の理念に照らしても、極めて意義深いものと位置づけられます。

また、博物館の運営および学芸員業務の多様性に触れることで、一般には見えにくい博物館の実態や、その専門性の奥行きを理解することができます。さらに、4年次に開講される博物館実習では、実習生として博物館業務に従事し、その一端を経験することにより、仕事の本質を考えるとともに、専門性の確立に伴う責任、他者との協働、自己管理能力や体力の重要性など、社会人としての基礎力を総合的に養う機会となっています。

以上のことから、音楽大学で学芸員課程を履修することの意義をまとめると以下の通りになります。

1. 芸術文化を多角的に学ぶことで、幅広い視野および知識を養う。
2. 音楽や楽器を「文化資料」として捉え、調査・研究し、後世に継承し、社会に伝えていく視点を身に着ける。
3. 楽器資料を通して、音楽や楽器について、歴史、文化、宗教、民族学など多面的な側面から学ぶ。
4. 社会教育施設である博物館の主要機能のひとつである「教育普及活動」を通して、「伝える力」を養う。
6. 博物館の運営や学芸員が担う業務の多様性と奥深さを知る。
7. 博物館実習を通じて、社会に出るための基礎力を養う。

3-5 近年の履修学生の傾向

最後に、本学学芸員課程における近年の履修学生数の推移および履修者の傾向についてまとめます。

学芸員課程が学内のすべての学生に開かれたのは、カリキュラム改変が行われた平成 29（2017）年度のことでした。したがって、新カリキュラムのもとで最初に学芸員資格を取得したのは、令和 2（2020）年度となります。図 1 は、カリキュラム改変以降、令和 2（2020）年度から令和 7（2025）年度までの間に学芸員資格を取得した学生数とその内訳を示したものです。令和 2（2020）年度の資格取得者は 18 名で、その後も 19 名、15 名、14 名、15 名、16 名と推移しています。年度ごとに多少の増減は見られるものの、平均すると毎年 16 名程度が安定して資格を取得していることが確認できます。

一方で、その内訳にはカリキュラム改変の影響を反映した変化が見られます。改変当初は旧カリキュラムの影響が残り、アートマネジメントコースの学生が半数近くを占めていましたが、近年では多様な専攻の学生が履修しており、履修者層の広がりがデータからも読み取ることができます。

また、令和 4（2022）年度には「科目等履修生」に関する規定が改正され、一定の条件のもとで、科目等履修生として学芸員資格の取得を目指すことが可能となりました。具体的には、大学を卒業した者（卒業見込みの者を含む。ただし短期大学は除く）を対象とし、面接による選考を経て履修が認められる制度です。とりわけ、「博物館実習のみの科目履修を受け入れている大学」は全国でも 7 大学と少なく、首都圏では和光大学と本学に限られています^(*)。このことから、本学は主に通信教育等で学芸員課程を履修している学生が「博物館実習」を受講できる大学として、貴重な受け皿となっています。なお、本学ミュージアムを博物館実習の実習先として選択できるのは、本学において当該科目を履修する学生に限られています。

さらに、近年の日本における国際化の進展を背景として、本学においても中国を中心とする留学生が増加しています。この傾向は学芸員課程の履修者にも見られ、科目等履修生の受け入れと相まって、多様なバックグラウンドを有する履修者が増加しています。

^(*) 文化庁ホームページ「学芸員養成課程開講大学」より

https://www.bunka.go.jp/seisaku/bijutsukan_hakubutsukan/shinko/about/daigaku/

(2026 年 4 月 1 日閲覧)

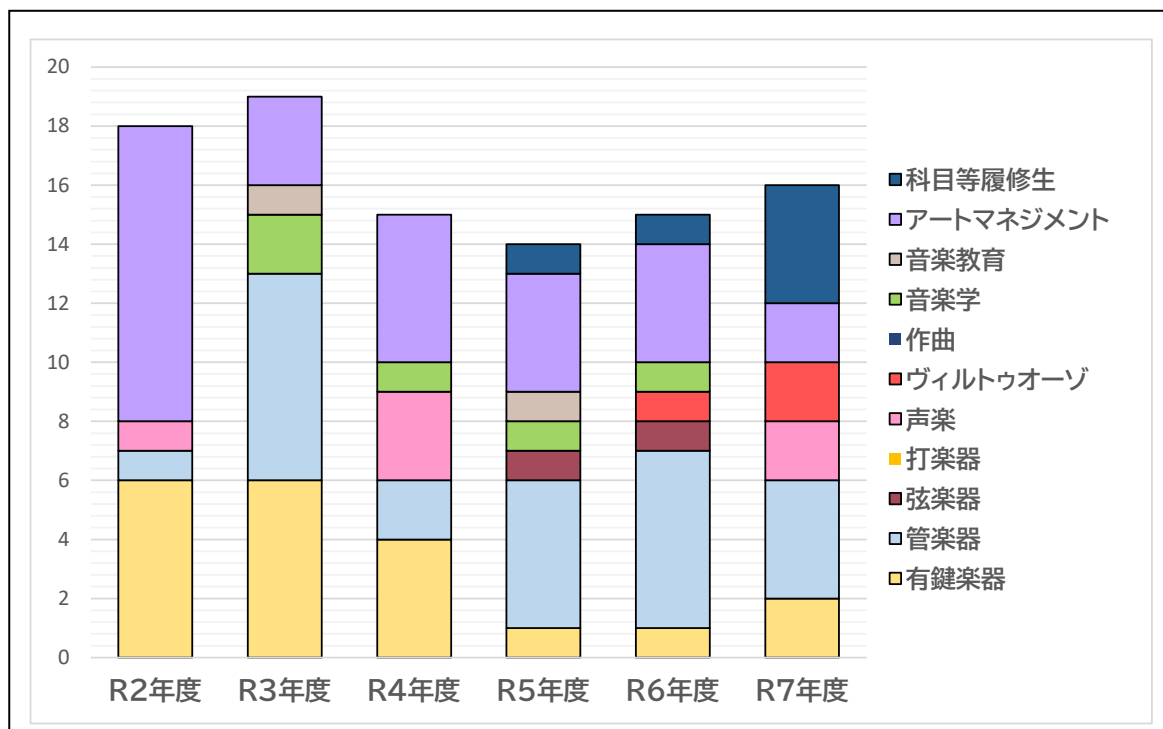


図1 学芸員資格を取得した学生数とその内訳〔令和2(2020)年度以降〕

3. 各科目の報告

(1) 博物館学概論

履修年次：1 (前期)

履修学生：11 名

担当教員：熊澤 弘

授業の概要

- 第1回 「博物館学」とは何か？その学問領域の射程と「音楽芸術」
- 第2回 「ミュージアム」の起源——文化芸術全体での役割
- 第3回 博物館の機能と目的・・・実際の博物館から知る
- 第4回 博物館の歴史①：世界の博物館（古代からルネサンスまで）
- 第5回 博物館の歴史②：世界の博物館（近代的なミュージアムの登場）
- 第6回 博物館の歴史③：19世紀から20世紀の博物館
- 第7回 博物館の歴史④：日本の博物館史①
- 第8回 博物館の歴史⑤：日本の博物館史②
- 第9回 博物館のコレクション：博物館資料とは何か①
- 第10回 博物館のコレクション：博物館資料とは何か②
- 第11回 博物館の「法的根拠」と「倫理」：博物館法と関連法規
- 第12回 博物館のための専門職員：学芸員／キュレーター とは
- 第13回 博物館と「社会教育」：生涯学習機関として
- 第14回 資料を取り扱う 音楽資料／美術工芸品の事例をもとに
- 第15回 講義のまとめ

「博物館学概論」は、学部1年次に、学芸員資格課程を学ぶすべての受講生が最初に学ぶ科目で、「博物館とは何か」「文化にとって、市民社会にとって、博物館はどのように機能しているのか」「博物館を通して何を学ぶのか」といった内容を学びます。またこの授業では、学芸員資格課程のみならず、文化芸術の基礎的な「教養」にかかわる内容も講義のなかで扱っています。これを行うため、受講学生でそれぞればらつきのある知識・教養の状況を、学生との対面授業のなかのやりとりで把握しながら、講義や課題の内容を調整しています。

学芸員課程の課程の導入である「博物館学概論」では、博物館という社会的・文化的制度の仕組みとその歴史的背景を学びつつ、「博物館資料」（博物館・美術館がコレクションとして所蔵する様々な作品・資料）の収集・保管・調査研究、そして展示を含めた教育的な活用の基礎概念を学びます。さらに、博物館をめぐる現在進行形の諸課題を見ながら、市民社会のための社会教育施設・文化施設である博物館の存在意義についても考察しました。

(2) 生涯学習概論

履修年次：1 (後期)

履修学生：10名

担当教員：守重信郎

授業の到達目標及びテーマ

生涯学習とは何か、なぜ生涯学習が必要なのかについて理解する。生涯学習が提唱された背景、その後の展開、生涯学習の行政について学び、生涯学習における社会教育の位置づけとその施設の活動について学ぶことで、生涯学習の全体像を把握することを目標とする。

授業の概要

事例研究を中心に、生涯学習の提唱から現在に至る過程を講義形式で学ぶ。講義ではパワーポイントと映像資料を活用する。また、各自で生涯学習施設を見学し、そのレポートを提出してもらうほか、その内容についてプレゼンテーションを行ってもらう。また授業内レポートを作成してもらい、その解説を行う。

- 第1回 生涯学習とは何か—生涯学習の理念
- 第2回 生涯学習の提唱とその後の展開—ユネスコ・OECD と生涯学習
- 第3回 わが国の生涯学習の流れ—各種教育審議会の答申
- 第4回 社会教育の理念と社会教育行政
- 第5回 社会教育施設①（公民館・生涯学習センター）
- 第6回 社会教育施設②（図書館・青年の家など）
- 第7回 社会教育施設③（博物館）
- 第8回 社会教育施設の事例研究
- 第9回 生涯学習と高等教育—大学の第3の機能と生涯学習
- 第10回 生涯学習を保证するシステムとしての大学博物館
- 第11回 生涯学習の課題と評価・世界の生涯学習
- 第12回 授業内レポート作成
- 第13回 生涯学習施設調査プレゼンテーション及び質疑応答①・授業内レポートのフィードバック
- 第14回 生涯学習施設調査プレゼンテーション及び質疑応答②
- 第15回 生涯学習施設調査プレゼンテーション及び質疑応答③・全発表のフィードバック

2025年度後期の「生涯学習概論」は、おおむねシラバス通りの内容を実施することができた。授業は講義と映像による形式を中心に進めた。学生には「生涯学習施設見学レポート」

を提出させ、最終の3回の授業で各自にその内容の発表を課した。また、プレゼンテーションの前に「授業内容レポート」を授業内に作成させ、学んだ内容を確認し、その理解を深めるように試みた。このレポートでは、「生涯学習」の将来像についての各自の意見を問う設問も設け、自身の生涯学習への関心を誘起する作業も行った。最後の学生によるプレゼンテーションは、アクティブラーニングの一環として、学芸員に必須なプレゼンテーション能力の養成にも効果があると考えられる。

(3) 博物館情報・メディア論

履修年次：2（前期）

履修学生：8名

担当教員：久保仁志

・授業の到達目標及びテーマ

メディアの多様化、それに伴う情報の増大の波は、博物館のあり方自体を変革した。「情報」を構築・整理・管理するメディア技術はアナログからデジタルへと大きく移行してきた。それに伴い「情報」は変質したのだろうか。どのように「情報」を扱えばより良い博物館として機能するのだろうか。「メディア」が可能にしているものとは何か。そもそも「情報」とは何か。これらの問題を博物館資料を通し「アーカイヴ」という観点から学ぶ。そして、資料収集・整理・保管・公開するための基本的な方法論を身に付けることを目標とする。

・授業の概要

様々な新旧メディアの混在によって多様化する諸事象とその表現を、観測・記録・伝達・表現するための方法論の構築を目指す。具体的には資料調査や展覧会の見学を行い、「情報化」の諸様態とメディアの活用方法について考えるための課題を貸し、レポート作成と発表、議論を行う。

・授業内容

- 1 はじめに：博物館情報・メディアとは何か
- 2 芸術史を通じたメディア史を学ぶ
- 3 メディア技術史の変遷に伴う情報形体の変遷を学ぶ
- 4 博物館の情報・メディア：ICT時代の博物館情報のあり方
- 5 理論1：博物館資料の情報化とは何か
- 6 理論2：ドキュメンテーションとアーカイヴ
- 7 理論3：アーカイヴという概念
- 8 理論4：デジタル・アーカイヴの現状と課題
- 9 理論5：アーカイヴと芸術
- 10 博物館における情報の発信・受信を考える：情報の管理と公開
- 11 実例研究1：様々なアーカイヴでの情報1（学外見学実習）
- 12 実例研究2：様々なアーカイヴでの情報2（学外見学実習）
- 13 学外見学実習の考察と発表と質疑応答1
- 14 学外見学実習の考察と発表と質疑応答2
- 15 総括：博物館における情報とメディアの諸様態について

2025 年 5 月 17 日（土）慶應義塾大学アート・センター | アーカイヴ／アート・アーカイヴ
資料展 XXVII「交信詩あるいは書簡と触発：瀧口修造と荒川修作／マドリン・ギンズ」見学
2025 年 5 月 24 日（土）：アーティゾン美術館 | 「ゾフィー・トイバー＝アルプとジャン・
アルプ」展見学

博物館情報・メディア論での施設見学は、同講義で主眼を置く「アーカイヴ」の概念に対する理解を深めることを目的とし、日本有数の戦後美術関連資料を所蔵する「慶應義塾大学アート・センター」において、所蔵資料、収蔵システム、特に戦後以降の美術における資料の重要性などについての講義を行った。また、同館の展示企画であるアート・アーカイヴ資料展XXVII「交信詩あるいは書簡と触発：瀧口修造と荒川修作／マドリン・ギンズ」において、アーカイヴの資料がどのように展示され得るのか、資料とは美術史においてどのような表現的意味を有するのかについて学んだ。事後、レポートの提出、および授業内での口答発表とディスカッションを学生が行うことによって、より総合的な視点において、美術館／博物館について学ぶための場となった。また、各回の終わりに講義ノートにデータ提出してもらい、各学生の理解度や誤解などについて把握したうえで、適宜講義内においてそれらについてのフィードバックを行った。



(4) 博物館展示論

履修年次：2（後期）

履修学生：7名

担当教員：久保仁志

・授業の到達目標及びテーマ

博物館資料「展示」の歴史と意義を学ぶとともに、博物館・美術館での展示活動を題材として「展示」を多角的な視点から学び、専門的知識がどのような「展示」によって鑑賞者へ伝達可能になるのかを考える。またそれだけではなく、「展示」することによってどのような社会・文化的効果を生み出せるのかをも考える。それらを通し、最小の展示ならば行える知識と技術を身に付けることが目標である。

・授業の概要

博物館資料の調査・研究の成果を鑑賞者に示すこと、資料を公開し多様な社会的かつ文化的活動に資することを目的とするのが「展示」である。この展示には、博物館およびギャラリーを中心に技術と知見が長く培われてきた。博物館・美術館での展示活動に着目し、展示がどのような効果を持つのか、その「学術性」「政治性」「社会性」について具体的な展覧会を例に考察する。また、自らの身の回りにある品を対象とし、最小規模の展示をシミュレートするワークショップを行う。

・授業内容

- 1 はじめに：博物館展示を考察する意義とは
- 2 博物館・文化財展示の歴史1：古代から近代まで
- 3 博物館・文化財展示の歴史1：近代から現代まで
- 4 展示の意義を考える1：展示の学術性
- 5 展示の意義を考える2：展示の政治性
- 6 展示の意義を考える3：展示の社会性
- 7 博物館展示の実例研究1：様々な展示の形式と展示を作り上げるためのガイドラインを学ぶ
- 8 博物館展示の実例研究2：美術館・博物館の展示実態を学ぶ
- 9 博物館展示のためのワークショップ1：身近な物品の調書作成
- 10 博物館展示のためのワークショップ2：物品解説の発表
- 11 博物館展示の諸問題1：展示品と諸解説（学外見学実習）
- 12 博物館展示の諸問題2：展示と諸印刷物のレイアウト（学外見学実習）
- 13 学外見学実習の考察と発表と質疑応答1
- 14 学外見学実習の考察と発表と質疑応答2
- 15 総括：博物館における展示の意義について

2025 年 10 月 12 日（土）：アーティゾン美術館 | 「ジャム・セッション 石橋財団コレクション×山城知佳子×志賀理江子 漂着」 「石橋財団コレクション選 特集コーナー展示 安井曾太郎」 見学

2025年12月13日（土）：慶應義塾大学アート・センター | 「SHOW-CASE PROJECT Extra-2 富井大裕 接点の都合展示／「旧ノグチルーム」 見学

イサム・ノグチと谷口吉郎の協働によって実現した第二研究室棟の談話室（通称ノグチ・ルーム）は部分的に移設され、限定公開されている建築空間である。いわゆる絵画や彫刻のような美術作品だけを展示物だと考えてしまうことが多いが、建築もまた展示物となり得るものであり、さらに不完全な形で残り得る展示物でもあることを学んだ。



また、「大切なものへのパースペクティブ」と題し、自らが大切にしている物の調書を作成するとともに、講義内で簡易的な展示を行い、物の傍らにてプレゼンテーションする課題を行った。身近な物を博物館学的に情報化すること（調書作成）によって、日常では見落としてしまう物の多面性と博物館学的方法の一端を学ぶことができた。

事後、レポートの提出、および授業内での口答発表とディスカッションを学生が行うことによって、より総合的な視点において、美術館／博物館につ

いて学ぶための場となった。また、各回の終わりに講義ノートデータを提出してもらい、各学生の理解度や誤解などについて把握したうえで、適宜講義内においてそれらについてのフィードバックを行った。

(5) 博物館経営論

履修年次：2（集中講義 | リモート）

履修学生：7名

担当教員：久保仁志

・授業の到達目標及びテーマ

博物館の目的、種類と機能、博物館と市民との関わり、博物館鑑賞者を増やすための方法と手段、意識調査、必要経費と収支について考察する。また、特に美術分野を焦点とし、美術館・ギャラリー・コレクター・批評家・鑑賞者の関係に着目することで博物館経営の現状と問題について理解を深めることを目標とする。

・授業の概要

博物館の経営活動の実際を中心に博物館経営における諸問題について学ぶ。博物館利用者の行動体系、指定管理者制度と公立博物館、企画展と集客増への取り組み、全国の博物館の連携などについて、主に美術分野の展覧会を焦点として学ぶ。また、美術作品がどのような価値体系をもとに流通しているのかについて、ギャラリー調査を行い、レポート作成と発表を通して考える。

・授業内容

- 1 はじめに：社会教育施設の経営をめぐる諸問題
- 2 博物館経営論史：世界の博物館・日本の博物館の経営
- 3 博物館経営の基礎概念1：組織体系
- 4 博物館経営の基礎概念2：法体系
- 5 博物館経営の基礎概念3：学芸員・職員
- 6 博物館と社会の関係について 地域社会と博物館
- 7 芸術作品の諸価値について
- 8 博物館とギャラリーとコレクター（学外見学実習）
- 9 博物館がマネジメントする諸対象について（学外見学実習）
- 10 博物館と政治・経済（学外見学実習）
- 11 学外見学実習の考察と発表と質疑応答
- 12 総括：博物館経営論における根本的諸問題

各美術館／博物館の文化事業がいかなる経済的背景のもとに成り立っているのかを、具体的事例に即して考察するとともに、芸術作品に付与された諸価値の多様性とそれらが孕む政治経済的な問題を中心に講義を展開した。

具体的には例えば以下のような講義を行った。2025年10月11日11時30分-17時30分 | エルメス・ル・フォーラム「体を成す からだをなす - FRAC GRAND LARGE収蔵作品セクション展」／ウィンドウ・ディスプレイ「イタリア庭園の馬たち」を通して、文化のパトロネージの一端と商業と美術の関係について確認した後、ギャラリー調査を行い美術作品の経済的価値と芸術的価値の関係性について学んだ。後者においては、「銀座の商業・ギャラリー3軒へ行き、それぞれのギャラリーの中で気に入った作品を1つずつ（計3作品）選び、作品価格とその理由を考えた後、ギャラリストの方に実際の価格表を見せて（または教えて）もらった上で予想額との価格差について考える。ギャラリストへなぜその価格なのかにつ



いて質問する」という課題をこなし、後に各学生の発表とディスカッションを行った。学生の多くは、ギャラリーという場や美術品を自らの生活とは無関係なものと捉えていたようだが、実際に購入可能なものでもあるという実感を持ったことによって認識に多大な変化がもたらされたようであった。

(6) 博物館資料論

履修年次：3 年（前期）

履修学生：12 名

担当教員：脇谷真弓・守重信郎

授業内容

	授業内容〔後期〕
1	博物館資料とは—モノから資料へ（脇谷）
2	博物館資料としての楽器—その視点のあり方（守重）
3	楽器資料について①鍵盤楽器（守重）
4	楽器資料について②弦楽器（守重）
5	楽器資料について③木管楽器（守重）
6	楽器資料について④金管楽器（守重）
7	楽器資料について⑤打楽器（守重）
8	楽器資料について⑥日本の楽器（脇谷）
9	楽器資料について⑦民族楽器（アジア）（脇谷）
10	楽器資料について⑧民族楽器（アジア以外）（脇谷）
11	楽器を通して見えるもの（脇谷）
12	楽器資料を深く理解するために—楽器以外の資料の重要性（脇谷）
13	資料の調査研究発表・質疑応答①（脇谷・守重）
14	資料の調査研究発表・質疑応答②（脇谷・守重）
15	資料の調査研究発表・質疑応答③・全発表のフィードバック（脇谷・守重）

授業は博物館資料としての楽器・音楽資料について特化しながら進めた。例年通り、第2回から第7回を守重が、第1回及び大第8回から第12回を脇谷が担当した。さらに第13回から第15回は学生のプレゼンテーションで、守重・脇谷両者が担当した。プレゼンテーションについては、事前に楽器資料の博物館的見地からのレポート提出を学生に課し、その内容について発表させた。パワポなどを使い自分の調査を発表するのは、学芸員に求められるプレゼンテーション能力の育成に効果的であると思われる（守重）。

2025 年度も楽器ミュージアムを積極的に活用した。日ごろ学生にとって馴染みが少ないと思われる民族楽器や日本の伝統楽器を中心に、持ち出し可能な「実物資料」を教室に持ち込んで授業を行った。また、楽器ミュージアム展示室で民族楽器展示室を中心に、授業を行った。詳細は下表の通りである。

回	授業内容	楽器ミュージアム利用の詳細	
8	楽器資料について⑥ 日本の楽器	楽器ミュージアム より資料借用	三線、三味線、大正琴、 平家琵琶撥、イヌ皮、ネコ皮
9	楽器資料について⑦ 民族楽器（アジア）	楽器ミュージアム より資料借用	竹筒琴、鼻笛、バリンビン、 カンドゥン、グングル、 ウッド
10	楽器資料について⑧ 民族楽器（アジア以外）	楽器ミュージアム より資料借用	ズルナー、ソーナ、チャルメラ、 アフリカの太鼓、ガイダ、 アーグール
11	楽器を通して見えるもの	楽器ミュージアムで授業	

なお、授業に取り組む姿勢や理解度（ともに平常点として計算）を把握するために、不定期で授業内に確認プリントを実施している。（脇谷）

(7) 博物館資料保存論

履修年次：3年（後期）

履修学生：12名

担当教員 脇谷真弓・守重信郎

授業内容

	授業内容〔後期〕
1	資料保存の意義と歴史（脇谷）
2	保存環境①（空気環境）（脇谷）
3	保存環境②（生物被害と IPM ①）（脇谷）
4	保存環境③（生物被害と IPM ②）・災害と文化財（脇谷）
5	素材別保存環境・歴史的楽器の保存と活用（脇谷）
6	資料の取り扱い・梱包と輸送（脇谷）
7	楽器資料の修理と保全（守重）
8	ピアノ工房見学①（守重）
9	ピアノ工房見学②（守重）
10	ヴァイオリン工房見学（守重）
11	管楽器工房見学①（守重）
12	管楽器工房見学②（守重）
13	課題発表とその考察・質疑応答①（脇谷・守重）
14	課題発表とその考察・質疑応答②（脇谷・守重）
15	課題発表とその考察・質疑応答③・全発表のフィードバック（脇谷・守重）

例年、授業は机上の知識に留まらないよう、なるべく実践的な内容を取り入れるよう工夫している。

例えば、保存環境（IPM）に関する授業では、キャンパス内に博物館があるという恵まれた環境を活かし、「楽器ミュージアムで IPM を行う場合、どのような点に配慮しながらどのような管理を行うべきか」、館内を歩きながら各自で具体的な考察をさせた。そのうえで、実際にはどのような点が課題となり、どのような管理を実践しているかについて併せて伝えた。

また、資料の取扱いについては、和室で掛け軸やひもの扱い、茶碗の扱いなど楽器以外の資料について、基本的な扱いを実践した。

また、授業に取り組む姿勢や理解力を把握するため、授業内で行う記述式課題や確認プリントなども例年通り実施した。（脇谷）

守重の担当授業は「楽器修理工房見学」が中心で、楽器資料の基本的な保存修復の知識を講義したのち、管楽器工房、弦楽器工房、ピアノ工房を実際に見学し、先方の担当者から専門家としての説明を受けた。詳細は「工房見学会報告」を参照（守重）。

博物館資料保存論における 2025 年度後期工房見学会 担当 守重信郎

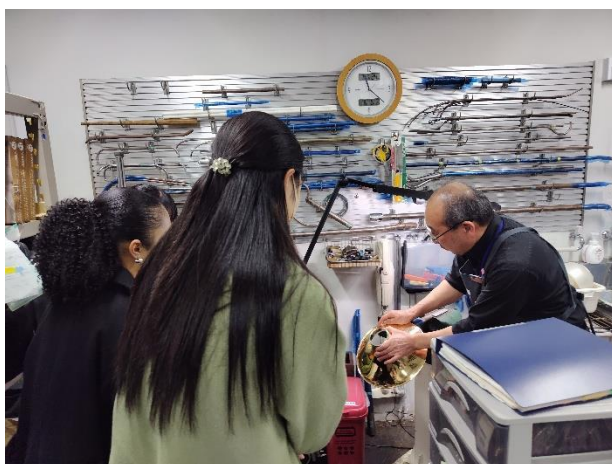
1. ヤマハミュージックリテイリング銀座店（木管・金管修理工房）

住所 東京都中央区銀座 7-9-14

日時 12 月 6 日（土）11:00～



木管楽器工房



金管楽器工房

例年通り、工房が狭い関係で二つの班に分け、木管楽器工房から金管楽器工房を見学する班と、金管楽器工房から木管楽器工房を見学する班に分けた。両方ともヤマハの職員が説

明と案内誘導を行ってくれた。特に木管楽器工房では、今回は若手の技術職員が丁寧な説明をしてくれ、細かな修理の方法のほか、「この道に入った動機」「どのようにリペアを学ぶか」などの体験談も聞け、学生にとっていろいろと参考になったと思える。金管楽器工房ではホルンのベルの「へこ出し」を実演があり、へこみがまたたく間に直っていくのをじっくりと見る事ができた。

2. 江古田ストリングス（ヴァイオリン工房）

住所 東京都練馬区栄町 15-5-1F

日時 12月13日（土） 11:30～



ヴァイオリン工房

「江古田ストリングス」は個人のヴァイオリン工房で、大変狭く2グループに分けて見学した。社長であり職人である上田氏から、ヴァイオリンの構造、製作工程、ニカワとニスについて、そして修理の具体的な内容について説明があった。また前回の管楽器工房の時同様に、修理職人の道に入ったきっかけや、どのように技術を学ぶのかについて話があり、管楽器職人とは違う「弟子入り方式」による学びの方法に学生も驚いていたようであった。最後に弓の毛替え作業を実演してくれ、小さな木片を小刀で切ってはめ込む作業の正確さに学生も驚いていた。

3. JMG 株式会社（ピアノ修理工房）

住所 埼玉県蕨市錦町 1-13-20-B

日時 12月20日（土） 10:00～



社長からの講話



ピアノ修理工房内の見学

例年通り、はじめに JMG 株式会社のギャラリーに着席し、社長の宿利氏からピアノの構造や部品についての詳細な説明があった。その際には木材やフェルトなどにも触らせてもらい、その触感を確かめることができた。その後、別棟のピアノ修理工房へ移動し、宿利氏が修理楽器の搬入から順を追ってピアノの修理の過程を説明してくれた。工房と言ってもその規模は大きく、広い工場で各工程が分担化されている。解体されたグランドピアノやアップライトピアノなど、普段見ることができないピアノの姿に学生も驚いた様子であった。最後にギャラリーに戻り、最新式の自動演奏ピアノの披露があった。内容も深く、大変充実した見学会であったと思う。

(8) 博物館教育論

履修年次：3 年（後期）

履修学生：10 名

担当教員：脇谷真弓

授業内容

	授業内容〔後期〕
1	博物館教育とは
2	博物館における教育活動の諸形態
3	博物館教育の歴史
4	つながるミュージアム
5	音楽系博物館の教育活動
6	ユニバーサル・ミュージアム
7	子ども向けプログラム立案
8	子ども向けプログラム製作
9	子ども向けプログラム中間発表
10	子ども向けプログラム仕上げ
11	子ども向けプログラム発表
12	教育プログラム発表・質疑応答①
13	教育プログラム発表・質疑応答②
14	教育プログラム発表・質疑応答③
15	発表のフィードバック及び総括

例年同様、授業は基本的な概念や知識を得る講義を中心とした「基礎編」、テーマに基づいた教育プログラムをグループで行う「実践編」、さらに「実践編」で学んだ経験を踏まえて、各自が自由なテーマで行う「発表」の3部構成となっている。

2025年度の「実践編」では、「楽器ミュージアムにおける子供向けの教育プログラム」をテーマとし、5回の授業を通して、グループごとに立案から製作、実践（発表）までを作り上げた。【写真1】は1班のプログラム検討の様子である。身近な素材で小学生が時間内で作れる楽器ということで、楽器の種類・材料・製作工程について検討の一方で、いかに楽器としてのクオリティを上げられるかがポイントとなった。【写真2】は、3班のプログラム実践の様子である。2班がプログラム参加者役として、実際に民族楽器演奏などの体験を行った。プログラムの検討の段階では、まず、楽器ミュージアムの資料の中から、触れることが可能な楽器を何点か提示し、それらの中から今回のプログラム内容に適した楽器を選ぶことから始まった。効果音として楽器を用いる場合、どのような物語に何の楽器を合わせて

いくつか、物語の選定と、物語に合わせた効果音の全体構成がポイントとなった。尚、物語の画像およびナレーションも自作である。

【写真3】は、2班のワークシートである。資料などから楽器について調べ、また何度も楽器ミュージアムに足を運んで、鍵盤楽器、ヨーロッパ管弦打楽器、日本の伝統楽器、世界の民族楽器の各分野から作問を行った。楽器の予備知識を必要とせずに、見学・観察することで誰もが簡単に解くことができるような問題とすることがポイントとなった。

◆実践編 楽器ミュージアムにおける「子ども向け教育プログラム」の実践記録

	メンバー	テーマと内容	実践場所
1 班	近藤、渡邊、上田、松谷	楽器製作体験 「マラカスとレインスティックをつくろう」 小学校低学年を対象に、身近な素材を用いて楽器を作り、最後にみんなで「おもちゃのチャチャチャ」の合奏をする。	PC 教室
2 班	後村、竹内、中村	クイズ形式のワークシート 「世界の楽器のルーツを探ろう」 中高生を対象としたプログラムで、楽器ミュージアムの4つの展示室の歩きながら、それぞれクイズに合う楽器を各自探して答える。(問題：計4つ)	楽器ミュージアム
3 班	今泉、鞭、佐野	民族楽器による音表現の体験 「世界の楽器を使って、音をつくってみよう」 小学校低学年を対象に、馴染みの少ない世界の民族楽器を使って、画像「浦島太郎」の物語に合わせて、効果音を入れひとつの作品を作る。	PC 教室



【写真1】1班プログラム検討の様子

素材の違いによって楽器の音色がどのよう
に変化するか試作して検討中



【写真2】3班プログラム発表の様子

発表者の指揮のもと、参加者役の学生が民族
楽器などで効果音を入れる体験プログラム



クイズ1

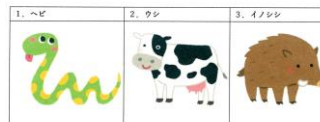
ピアノの先祖の楽器は〇〇、チェンバロ、ダルシマーなどである。
〇〇は何でしょう？



ヒント 「鍵盤楽器」の標榜の入口付近を見よう！(左側が難しいよ)

クイズ3 選択問題

三脚は、何の皮を使っているでしょう？



クイズ2 選択問題

リコーダーはどこ地方から生まれた楽器でしょう？

1. アフリカ
2. ヨーロッパ
3. アジア
4. オセアニア



クイズ4 選択問題

アフリカの楽器であるパラフォンはどんな場面で使われてきたでしょう？

1. 魚獲を知らせるとき
2. 村と村の通信手段
3. 結婚式などの儀式



【写真3】2班プログラムで使したワークシート

◆発表「博物館教育プログラムをつくる」

No.	専攻	氏名	タイトル
1	Pf.	後村 恒希	～世界3大ピアノ～その魅力の秘密
2	Pf.	近藤 紗矢	木更津市郷土博物館金のすずで埴輪を作ろう！
3	Hr.	渡邊 三鈴	歴史から見る季節の和菓子
4	Vo.	今泉 涼介	ミニ鉄道エンジニア体験
5	Vo.	竹内真菜美	生態園と本館展示をつなぐ体験型学習
6	Vo.	鞭 小々音	ツマグロヒョウモンの飼育を通じた博物館教育プログラム提案
7	アートマ	上田連也	絵画の楽しみ方を増やそう
8	アートマ	中村よしの	作品を“耳”で見る体験
9	アートマ	松谷 友里菜	甘葛煎ってなあに
10	アートマ	佐野 心咲	絵の中におじゃまします

(9) 博物館実習

履修年次：4（通年）

履修学生：16名

担当教員：久保仁志

・授業の到達目標及びテーマ

博物館とは資料を収集、保管、展示し、教育的配慮の下に一般の利用に供し、これらの資料に関する調査研究と公開を目的とする機関である。実際の博物館での実習、および合同で展覧会を企画することを通じ、博物館においてこの営みがどのように行われているのかを知ること、博物館資料を扱うための基本的方法を身につけることを目標とする。

・授業の概要

学内での講義と武蔵野音楽大学楽器博物館またはその他の博物館等で、博物館の営みに関する体験実習、展覧会の調査を行い、博物館の環境、組織、展示活動への知見を深める。また、実習先の博物館（および他の博物館）の展覧会・講習会などの催事に、学芸員の立場と一般利用者の立場を同時に意識し参加する。最後に学芸員過程の集大成として展覧会を企画する。

・授業内容〔前期〕

- 1 博物館実習の目的
- 2 博物館・美術館の現状①：日本の博物館
- 3 博物館・美術館の現状②：日本の美術館
- 4 博物館・美術館の現状③：世界の博物館・美術館
- 5 博物館資料の取り扱い方①：美術資料
- 6 博物館資料の取り扱い方②：図書資料
- 7 博物館資料の取り扱い方③：工芸資料
- 8 博物館資料の調査方法① 楽器資料を調べる①
- 9 博物館資料の調査方法② 楽器資料を調べる②
- 10 博物館資料の調査方法③ 楽器資料を調べる③
- 11 博物館資料の調査方法④ 楽器資料を調べる④
- 12 博物館資料の調査方法⑤ 楽器資料を調べる⑤
- 13 展覧会企画・実施実務研究①
- 14 展覧会企画・実施実務研究②
- 15 展覧会企画・実施実務研究③／博物館館務実習事前指導

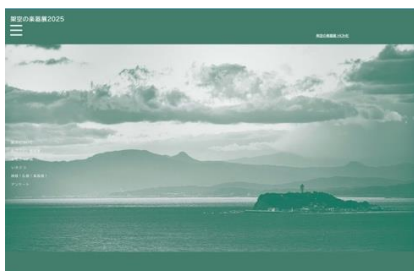
・授業内容〔後期〕

- 1 展覧会企画・実施実務研究④
- 2 展覧会企画・実施実務研究⑤
- 3 展覧会企画・実施実務研究⑥
- 4 博物館館務実習事後指導
- 5 企画展示に伴う諸手続きを知る①：企画制作
- 6 企画展示に伴う諸手続きを知る②：展示プランの検討
- 7 企画展示に伴う諸手続きを知る③：資料制作
- 8 企画展示に伴う諸手続きを知る④：印刷物制作・宣伝広報
- 9 企画展示に伴う諸手続きを知る⑤：輸送展示撤去の実際
- 10 課題発表：オリジナルの展示企画制作①
- 11 課題発表：オリジナルの展示企画制作②
- 12 課題発表：オリジナルの展示企画制作③
- 13 課題発表：オリジナルの展示企画制作④
- 14 課題発表：オリジナルの展示企画制作⑤
- 15 総括：博物館の外観と内観について

本年度は、科目履修生以外のすべての学生が脇谷真弓氏指導のもと、楽器ミュージアムにて実習を受講した。その中で実際の展示実習を行うため、本講義においては楽器ミュージアム協力のもと、架空の展覧会「架空の楽器展2025」をWEB上で行った。4つのグループに分かれ、I「私口楽器展」、II「お稽古べや展」、III「いきさつ」、IV「神様！仏様！楽器様！」という4つのテーマで展示を企画し、それぞれカタログを作成し公開した。

架空の楽器展2025HP

<https://musashinoondai.wixsite.com/website-6>



TOP



展覧会について



私口〔ノ〕楽器展



お稽古べや展



いきさつ



神様！仏様！楽器様！

■私口〔ノ〕楽器展

企画：古田千裕、東原じゅり、和田タチアナ、小野川穂香

編集：古田千裕

デザイン：東原じゅり

図案作成：小野川穂香

本企画は、「私の楽器」を、私と楽器、そして音楽との関係性として捉え直すことを目的としたものである。楽器と何らかの形で関わった経験を持つ人、あるいは現在も関わり続けている人にカルテへの記入を依頼し、それぞれの関係性の様態を可視化する試みを行った。

「口」には関係性を考察する基礎となる四種の演算記号を用い、多様な関係性の中に見られる類似と、類似の中に潜む差異を浮かび上がらせる構成としている。カルテは企画者を含む15名によって作成された。さらにカタログの末尾には空白のカルテを付し、鑑賞者自身が「私口楽器」という関係を考える契機を提供した。本企画は、楽器が持つ力を音色とは異なる側面から捉え直す契機を提示するものである。

■お稽古べや展

企画：長根萌生、佐藤仁哉、古庄美晴、藤村亘

デザイン：長根萌生

本企画は、明治期から令和期に至るまでの楽器の「お稽古」に焦点を当てたものである。一

般に演奏会では演奏行為そのものが注目されがちであるが、その背後には演奏家が費やす膨大な稽古の時間が存在する。楽器演奏においては、プロ・アマチュアを問わず技術習得のための時間が不可欠である。また、その時間は抽象的なものではなく、特定の時代と場所における具体的な時間として存在している。そこには文化的背景の変化が反映されており、お稽古の方法にも時代ごとの変遷が見られる。本企画ではその変遷に着目することにより、楽器習得において変化する要素と継続する要素の双方を検討することを試みた。

■いきさつ

企画：小林愛音、田中陽己、今泉瑠菜、関美穂

デザイン：小林愛音

イラスト：今泉瑠菜

本企画は、楽器が有する「いきさつ」、すなわち履歴に焦点を当てたものである。演奏を鑑賞する際、私たちは現在の演奏行為に意識を向けがちであるが、個々の楽器はそれぞれ固有の歴史や来歴を有している。本企画では、事実に基づく履歴と架空のいきさつを織り交ぜる構成を採用した。それにより、目の前には直接現れていない履歴を想像的に投影しながら楽器を捉える視点を提示し、楽器を見ること、また演奏を体験することの新たな意味について考察する契機を示した。

■神様！仏様！楽器様！

企画：小室美優、今川知彩、川村桃加、藤寄緑

編集・執筆：今川知彩、藤寄緑

デザイン：川村桃加

本企画は、神仏と呼ばれる彼岸的存在と人間との間を媒介する存在としての楽器に着目したものである。楽器が宗教的・儀礼的文脈の中で果たしてきた役割に注目し、人間と超越的存在の関係を媒介する装置としての楽器の側面を提示した。

【本学楽器ミュージアムにおける博物館実習の実施状況報告】

実習生人数 人数 12名
 場所 武蔵野音楽大学楽器ミュージアム、歴史展示室、
 パルナソス多摩楽器展示室、入間キャンパス収蔵庫
 担当教員 脇谷真弓、須藤麻紀子

グループ① 9/4、5、8、9、11/1〔5日間〕7名

	日時	実習内容
1	9/4 (木)	江古田楽器ミュージアム「概要説明」「企画展（多摩キャンパス）について」 「楽器点検」「見学ガイドについて」
2	9/5 (金)	入間キャンパス収蔵庫「楽器移動準備」「楽器点検」
3	9/8 (月)	パルナソス多摩 「平ケース清掃・展示・前回展示資料の搬出・展示ケース清掃・常設展示」 在宅実習（文献調査：見学ガイド準備）
4	9/9 (火)	江古田歴史展示室・BH 地下「歴史展示室見学」「歴史展示室資料整理」 江古田楽器ミュージアム「楽器点検」「ワークショップ・見学ガイド準備」
5	11/1 (土)	江古田楽器ミュージアム 「ワークショップ・見学ガイド準備」 「開館業務（ワークショップ・見学ガイド）」

グループ② 9/11、12、16、17、11/2〔5日間〕5名

	日時	実習内容
1	9/11 (木)	江古田楽器ミュージアム「概要説明」「企画展（多摩キャンパス）について」 「楽器点検」「見学ガイドについて」
2	9/12 (金)	入間キャンパス収蔵庫「楽器移動準備」「楽器点検」
3	9/16 (火)	パルナソス多摩 「開梱・展示・展示仕上げ」 在宅実習（文献調査：見学ガイド準備）
4	9/17 (水)	江古田歴史展示室・BH 地下「歴史展示室見学」「歴史展示室資料整理」 江古田楽器ミュージアム「楽器点検」「ワークショップ・見学ガイド準備」

5	11/2 (日)	江古田楽器ミュージアム 「ワークショップ・見学ガイド準備」 「開館業務（ワークショップ・見学ガイド）」
---	----------	---

今年度の博物館実習の受け入れは12名で、二期に分けて実施した。博物館実習は、これまで学んだ博物館学の知識を基に、博物館現場で学芸員の多岐にわたる業務の一端を経験するという点で、学芸員課程における集大成ともいえる位置づけとされる。

入間キャンパスにおいては、主に資料の保存や管理・点検を行い、パルナソス多摩楽器展示室においては、企画展の展示替えを実施し、実際に学生たちが協力して展示を行った。楽器は大きさや形状がさまざまであるため、楽器の特徴をよく理解した上で、安全にかつ美しく展示する必要がある。学生たちは、日頃触れる機会の少ない民族楽器や歴史的な西洋楽器に触れながら、展示の難しさと楽しさ、また企画展示の一連の流れを学んだ。

江古田キャンパスにおいては、来年度開設が予定されている「武蔵野音楽大学歴史展示室」において、展示や開設に向けた準備などを行った。このほか、一般来館者への公開業務および教育普及活動として、「学生による見学ガイド」および「ワークショップ」を、ミューズフェスティバルの特別開館に合わせて実施した【写真1】。見学ガイドツアーは、原稿などは存在しない。音出しや体験が可能な楽器リストの中から、グループごとに紹介したい楽器を複数選び、その楽器について各自で調べた上で、見学ガイドとして見学者が興味をもつ内容となるよう構成を練った。

【写真2】は、開館前に行った「見学ガイド」リハーサルの様子で、【写真3】は実際の見学ガイドの様子である。どのような方が何人くらい見学に訪れるかは事前に把握できないため、その場の臨機応変なガイド力が求められる。学生たちは緊張しつつも、達成感・充実感が得られる経験だったと、日誌に感想が多数寄せられた。

【写真1】学芸員課程履修学生による「見学ガイドツアー」及び「ワークショップ」



【写真2】

「見学ガイドツアー」 事前練習の様子



【写真3】

ミューズフェスティバル特別開館
「見学ガイドツアー」



【写真4】

ミューズフェスティバル特別開館
「楽器製作のワークショップ」



編集・発行	武蔵野音楽大学 音楽総合学科 アートマネジメントコース
発行日	令和8（2026）年4月1日